

研究滞在記

ナノスピントロニクス分科

吉村 瑠子

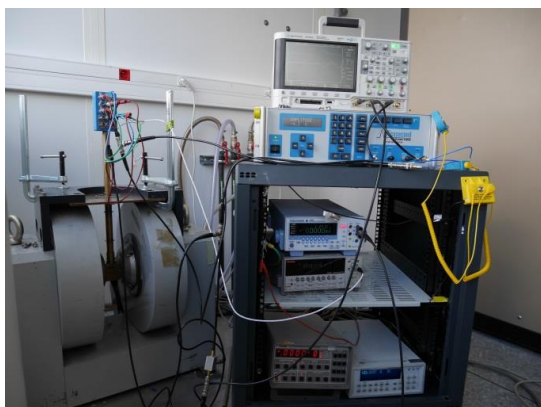
私は化研若手研究者国際短期派遣事業の支援を受けて、フランスのパリに1ヶ月間滞在しました。パリはコンパクトで私の滞在しているところから、有名な美術館や大聖堂まで電車ですぐに行くことができ、とても充実した休日を送ることができました。特に、私はヨーロッパの建物が好きだったので、パリを歩いているだけで、とても楽しい気分になりました。



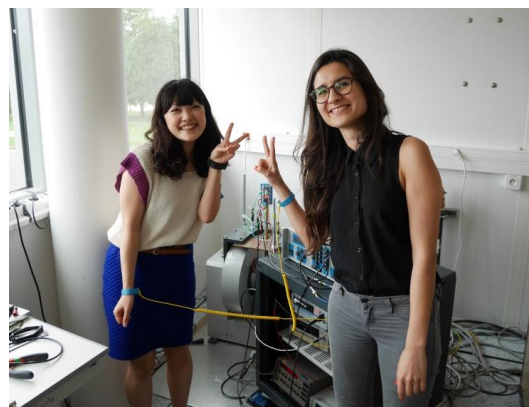
私の通っていた研究所は、CNRS/Thales lab というところで、パリから電車とバスを使って1時間弱のパレゾーという地区にありました。研究所の周りには、パリとは対照的に畑だらけで、研究施設が点在していました。研究所には、フランス人だけでなく、ヨーロッパやあらゆる国のスタッフやポスドク、学生さんがいて、とても楽しそうに研究していました。国籍の異なる人たちが、一緒に研究している姿を見て、島国の日本とはまた違った雰囲気を感じ、とても羨ましく思いました。また、初めはとても心細く、不安いっぱいでしたが、研究所の方たちは、とても親切で、私のことを気にかけて下さったので、その不安はすぐに無くなりました。私も、困っている人がいれば、助けてあげられるような人になりたいと強く思いました。

フランスでの研究内容は、強磁性体中の磁区と磁区の境界である「磁壁」を電流で移動させる実験でした。京大で作製した試料を持って行き、その試料の電気測定をフランスで行いました。京大では、既に研究室に確立された測定系があるので、自分の測定用に改良すれば測定ができたのですが、フランスでは一から測定系を立ち上げなければいけなかったため、大変苦労しました。しかし、研究所の多くの方たちに助けてもらい、無事に測定系を立ち上げることができました。1ヶ月という短い期間では、成果を出すほどにまで至りませんでした。実験は引き続き京大で続けられることになりました。フランスで出会った人たちと、これからも研究で繋がっていただけることを私はとても嬉しく思っています。

私は、慣れた環境を離れることにとっても抵抗を感じる性格でしたが、1ヶ月間の海外生活を通して、新しい世界に飛び込むことの素晴らしさを学びました。これからも新しいことに挑戦していきたいと思っています。最後に、このような貴重な経験をさせて頂いたことに、深く感謝申し上げます。ありがとうございました。



フランスで立ち上げた実験装置



研究所の学生さんと